くまざさ

第13号
発行
釧路湖陵同窓会
発行日
昭和61年3月10日
題字
長内宏同窓会会長
印刷所
綜合印刷KK

なつかし 青春の友との再会

五十年ぶりに釧中十八期生 ふるさとに集合

五十年ぶりの再会を果した釧中十八期生

釧中第十八期生、昭和十年三月卒業生で、現在六十八歳である。昨年九月十八日に卒業五十周年を記念して、ふるさとの地にうれしい再会を実現させた。

遠くインドネシアでコンニャク農園などを経営している石井俊知さん。東京三鷹市の医師板垣太郎さん。仙台市在住の渋谷源郎さん地もとでは、定光寺の大道晃仙住職、前教育長の菊地常男さんら、多士済々の三十人がはせ参じた。出席者は紹介者以外次のとおり。

石黒　龍男(釧路)　板本　良吉(釧路)
石井　正治(釧路)　浦田　繁(同)
金子　養悦(厚岸)　軽部　晴夫(釧路)
川崎　広治(同)　熊谷　猛哉(旭川)
坂本　庄一(函館)　笹田　哲夫(釧路)
玉村興八郎(釧路)　冨山洋太郎(池田)
野沢佐五郎(釧路)　長谷川信三(札幌)
幅口　實(釧路)　平岩　作次(同)
舟越　芳男(函館)　松本　清司(釧路)
三沢　十郎(札幌)　三宅　誠(釧路)
村山　諭(美唄)　森　郁夫(釧路)
森　弘(札幌)　樋田　市蔵(釧路)
谷本　定徳(白糠)

定光寺で、卒業生百十八名のうち五十六名の物故者の追悼供養を行った。その後、入院加療中であった恩師、三原正二さんを見舞い健康回復を願って、全員で激励の拍手を贈った(今はその願いもむなしく他界されている)。

一行は、川湯温泉に向かい、懇親会の中でたちまち心は釧中時代にもどって歌い、語り、過ぎ去った青春をなつかしんだ。

応援歌を歌って釧中時代をなつかしむ

ブラジルから釧中八期生 相場真一氏来釧

同窓生の丹葉節郎さんと

ブラジルで前南米銀行の副頭取を務め、日本・ブラジル青年交流会長の要職にある釧中八期生の相場英一氏が昨年八月末に来釧した。同窓には丹葉節郎氏や鈴木栄氏がいる。今日はブラジルに渡ってから五十五年目、二度目の訪釧だそうである。釧中卒業後小樽高商(現在の小樽商大)に進学した。卒業時は不況の時代で、大志を抱いてブラジルに渡り、四年ほど百姓として働き、南米銀行に入社したそうである。

来釧のたびにふるさと釧路がめざましい発展をしているので、今浦島の感を強くしているとのこと同窓の丹葉さんの案内で、市内の各所を訪ねて歩き、はるか昔の少年の日々の生活を懐しんでいた。

相場氏は五十歳でブラジルに帰化し、日本との友好と、第二の母国のために精力的に活動しているのである。広い世界にはばたく、同窓の大先輩が、そこにいる。

＝対談＝

同窓会の活動をめぐって

―新、旧会長の挨拶にかえて―

○昨年八月の総会で役員の改選が行われ、組村会長（湖1）から長内新会長（湖2）にバトンがタッチされました。そこで今夕（去る二月二十二日）は新旧会長さんに同窓会のかゝえている種々の問題や展望などを大いに語っていただいてこれからの参考にしたいと思います。長年にわたり同窓会の実務を担当されている遠藤幹事長さんも見えておられますので〝橋渡し〟といった意味でお二人のお話しの中に入っていたゞいて、まずい司会の補足もしていただければ……と思います。少し前おきが長くなりましたが、先づ最初に退任された組村会長さんから会長在任中をふりかえって一言……

組村　そうですね、先づ在任六年の中で大過なく任を果たせたのは幹事長をはじめとする各役員の絶大な協力をいただけたからと思う。実務の遂行上では、各副会長さんに、会長代行担当、総会対策担当、同窓会館建設担当、会報〝くまざさ〟編集担当とそれぞれ役目を分担したことと、今年で六回目を迎えた在校新入生に対する〝記念講演会〟の開催。そして果して発行が継続するか懸念されていた会報〝くまざさ〟が休刊なし12回まで発行できたこと等は一応成功し、よろこんでいいことではないかと考えます。しかし提言以来、種々の事情から未だ足踏みしている同窓会館設立については懸案を残したまゝなので引継ぎにあたってもどうも心残りで残念といった感じと、長内新会長にも誠に申し訳ない気持ちです。

組村氏

長内　私は副会長で会長代行担当の役をさせられましたが、何をして良いのやらわからないことが多くありました。他の副会長さん達も皆私と同じだったと思いますが、動き出すうちにこれから考えて行かなければならぬことが多くあるとは思いますが、長い目で同窓会の運営を見つめれば、結果的には担当の分担制は良かったことだと思いますネ。

充実して来た記念講演会

○在校新入生を対象にした講演会のお話でしたが幹事長さん、今まではどんな方がお話しになったのですか。

遠藤　最初は梅山現教育長、二回目からは、鰐淵現市長、組村会長、田畑允道新論説委員、菅原式也本行寺住職、そして昨年は佐久間北大工学部教授の順だと思います。

遠藤氏

組村　この講演会のそも〳〵のねらいは、後輩同窓生に〝人生の進路〟といったことについて広く考えることが出来るいゝ計画はないものか、といったところにあった。しかしそれが回を重ねることによって〝人間の生き方〟といった内容の多面的なものになりつゝあり、菅原先輩のお話しは一年生の諸君に大きな感銘を与え、お話しをきゝながら目に涙する生徒もいたと聞いています。

長内　その点では有意義な講演会のようですネ。一年生だけにでなく場合によっては全校生徒を対象にしたものにしてもいゝのではないでしょうか。学校の方とも十分相談しましてネ……。

○　お話の演題も「進路の選択と我が人生」から「諸君の青春を充実せしめよ」そして「我が青春に於ける誠・愛・勇」といった内容に移って来ていますネ。実力のある先輩が沢山活躍しているのですからより充実・内容ある企画で発展継続したいものですネ。

早期実現したい校舎改築と同窓会館設立

組村　道新からの土地の寄贈もあって現在地に同窓会館設立の方向で具体化を進め、そのため実行委員会もつくり一日も早い実現化を勢力的に進めて来たのだが、校地面積等の関係からも緑ヶ岡に移転という事情の変化もあって同窓会館建設問題も新校舎図面が明確になった上で会館設計図の具体化をすゝめなければならない。会館設立の前提になるものは校舎改築の早期実現でありそのための調査費が道予算の中で一刻も早くつくことが必要だ。

長内　昨年暮にも市長・学校長・ＰＴＡ会長・ＰＴＡ後援会・同窓会等の関係者で知事・道教委・道議会各派等への陳情も行って来ていますが今年には是非調査費の予算づけが実現してほしいところです。

遠藤　それが実現すれば、同窓会館設立の方も建築申請許可・免税許可証明をうけて具体的な寄附金の募集に入れるのですが……。

組村　とにかく一日も早く寄附金募集の活動を実現したいものだ。会長退任だが懸案を残し気が静まらない。

出席者

組村真平前会長（釧32期）
長内　宏新会長（湖2期）
遠藤隆吉幹事長（湖4期）
司会　記録　編集担当
徳田　宏・豊島　弘道

広報〝くまざさ〟をめぐって

組村　当初この種のものは三号まで発行できればあとは何とかなるかも知れないと言われながらの企画であった。それが毎年八月と三月の二回、計十二号を数えることが出来、今度が十三号目だ。編集担当副会長は、釧路教職員湖陵会の正副会長の中のお一人が担当するかたちで実際面は教職員湖陵会の方々にお願いして来た。本当に尽力してもらって感謝しています。

○我々も三号までという約束で編集作業を引受けましたが十三号になってしまいました。編集に片寄りがあったり、内容・表現が〝カタイ〟という批判もあり、もっと広い層の人々の手で……と希望しているんですが。

組村　編集カラーを豊富にするにはその方が良いと思う。市役所などにも多くの会員も居るし組織もあるので、そういうところでも編集を担当してもらうとか、その他多くの職場などで交代して行うとか考えるのも一方法かナ。

○広報紙の配布状態というのはどうなっているんですか。

遠藤　東京・札幌・十勝の組織のあるところを通じたり、何といっても各期の幹事を通じて配布してもらっていますが、大体行き届いているんじゃないでしょうか。

一期一万円の運営会費拠出を!!

○会則では一人月五十円（年間六百円）を同窓会費として納めることになっていますが、実際にこれは徴収困難なことでしょうネ。

長内　卒業生が同窓会に入会するときに納める時以外は極めて困難です。それで常任幹事会の申し合わせとして一期年間一万円を納めることにしているんです。

組村　卒業期が釧中・湖陵で七十期にもなるけれど、同期会の組織化のうすい若年期（卒業間もなかったり、学生であったりの）を除いて四十期は集まるとしても、実際には十期～十二期分位、つまり金額では十万～十二・三万が納入される程度で非常に少ない。幸い教職員湖陵会から毎年これと同額程度の支援金があるので助っているんです。同会はもう三十年もこれを続けてくれていますので通算すれば数百万円の支援になるわけでしょう。各期一万円の拠出は是非協力してほしい！

○総会の時など出していただける先輩から一万円とか、協力してもらえる人には千円でも二千円でも出してもらうということもあっても良いのじゃないですカ!?

総会は楽しく、絆を強く

○総会も一昨年には小松キャスター・昨年は佐久間北大教授・鈴木慶大助教授など招いて文化的というか、教養向上を若干加えたものが企画されて反響もさま〳〵あるようですが……。

組村　十年前から、例えば一期十一期、二十一期といった現在やっているローテーション方式の総会当番期制をとったことで縦の連携と同期の横の連帯がとれるようになった。たゞ当番期が張り切りすぎて、次の当番期が何をやったら良いのか戸惑ったり極端に走ったりしては問題も出よう。

長内　各期の自主性と同窓会の総会としての統一性をバランス良く保って行きたいものですね。その点総会担当の副会長を中心に各期当番幹事の理解協力をお願いしたいところです。同窓会の目的は会員相互の連絡親睦と母校の後援と会則にうたっていますが、前者を先づ第一の目的と考え、総会はそのための楽しく強い心の絆をたしかめあう場だと思っています。後者については学校との連携の上で考え行動すべきものではないでしょうか。釧中約参千名・湖陵一万七千名の同窓会員、今や湖陵時代の会員多数の中で同窓会の会長も次第に若年令の世代に交代して行くでしょう。また女性の会員の活躍も期待されることでしょう。その点で今期は割方さん、原さんなどの女性役員も増員になりましたし結構なことだと思います。私は経験も不足で若い未熟者の会長ですが、世情の推移を見通しながら〝だから湖陵の同窓会はいゝ〟と皆で感じられるような会の発展のために少しでも責任を果すことが出き、役立てばと思っています。

組村　セクトにおちこまないある点では開かれた同窓会でもありたい。新会長さんに期待するところ大です。幹事長さんよろしく。

○丁度、明るい抱負、ご挨拶となったところです。ではこの辺で……。

長内氏

昭和六十年度 役員名簿

顧問	釧八	丹葉節郎
〃	釧三	米内富久司
〃	釧三	古谷武一
〃	釧六	坂下忠勝
〃	釧七	米沢悟空翁
〃	釧七	中村隆
〃	釧三	組村真平
相談役	釧三	田村佳男
会長	湖二	長内宏
副会長	湖三	割方道子
〃	湖五	豊島弘道
〃	湖六	本間秀一
〃	湖七	久本甫
〃	湖七	原轟戸
幹事長	湖四	遠藤隆吉
副幹事長	湖一〇	関口政司
〃	湖三	沢田征矢
会計長	湖八	山本寿福
会計監査	湖三	坂上洋二
〃	湖五	徳田瑛子
〃	湖八	神崟躬

湖陵同窓会総会開く 650名参集

豪華！講演二題、景品抽選会ありの新趣向で当番期ハッスル

昭和六十年八月十七日(土)湖陵同窓会総会並びに懇親会が釧路商工会館を会場に約六百五十名と云う過去最高の会員を集めて盛会裡に行われた。本年度は当番幹事各位の熱意と英知を結集し綿密な計画により過去の慣習にとらわれず土曜日にこの会を設定したものである。事務局としてもお盆のさなかの土曜日でもあり一抹の不安を感じなかったと云えばうそになるであろう。しかし会場あふれんばかりの会員の姿を見て安堵の胸をなでおろすと同時に今回このように大担な発想のもとにこの日を設定した湖陵三期を中心とする当番幹事期の皆様に対しただ敬服するばかりでありました。

ハッスル　当番期　ラスマエ会（湖陵３期）の面々

総会は例年通り中村隆氏を議長に迎え、要領を得た。しかも素早い議事進行のもと実にスムーズに運ばれまた新役員も決まり無事終了いたしました。この総会の中で四十四年間に亘り釧中並びに湖陵高校一筋に教鞭を取りこの度教壇を去れた男澤先生であるが、数多くの生徒の指導にあたられ、またあらゆる分野に多大な功績を残された先生の長い間のご苦労に対し感謝状と記念品が手渡され会場われんばかりの拍手と声援が送られ、いまさらながら先生のご人徳を伺える一場面でありました。議事終了後『科学する釧路をめざして』と題して湖陵三期の慶応義塾大学医学部助教授の鈴木秋悦氏、同じく北海道大学工学部教授の佐久間哲郎氏の講演が行われた。お二人のそれぞれ各分野での今後の益々のご活躍を期待する気持でいっぱいでした。また懇親会も実になごやかなうちにも盛りあがりを見せ、この日の呼び物の一つになっている景品抽選会が行われ、〝カラーテレビ〟あるいは〝お米〟、そして〝鮭〟など種々趣向をこらした景品に拍手で喜びが足りず思わず飛び上って喜ぶ者また一番違いでテーブルを叩いてくやしがる者など実に楽しい雰囲気の中、アッと云う間に懇親会の終りを見てしまったものです。

スピーチ　慶応義塾大学医学部助教授　鈴木秋悦氏（湖陵３期）

本年度はすべてに豪華であり、企画そして内容が実にダイナミックであり湖陵三期を中心に当番幹事期一同の力を充分に発揮された総会であったと思われます。

最後にこのように楽しい会を催され、しかも何か月も前から準備にご苦労された当番幹事の皆様に対し心からお礼を申し上げる次第です。

御卒業・御入学の
晴れの日を
歴史の１ページに…

釧路市幣舞町２番２号
株式会社 吉井写真館
代表取締役　吉　井　祥　朔（湖陵18期）
電話　41－4798番

青春譜・湖陵ケ丘

〈13〉

釧中32期　奥田達也

屈辱感を受けよ
人生の成長に役立つもの

いじめ

いま社会問題となっている〝いじめ〟を湖陵ケ丘に拾ってみる。

大正二年の開校時には、地元の子供らが待ち望んでいたから、高等科三年の十六歳までが十二歳以上の新入生に混っていた。当然にいじめがありそうだが、熱田校長の「諸君は釧中第一回目の入学者であり、その成績の良し悪しは全社会の注目することであり、かつ直ちに釧中の批判ともなる」の注意もあり、厳しい勉学に励んで、いじめの余裕はなかった。

しかし二回生野坂作五郎はいう「私ら二回生数名が卒業式後に一期下の連中と一回生中川久平らに〝君らが卒業できたのは、阿部校長の人情あふれる処置による。釧中の名誉を汚されぬよう今後は努力せよ〟と説諭された」と。

教員十二名に生徒五百名の学校での嫌やな思い出といえよう。

そのためか野坂は終生表面に出たがらず、しかし市助役として努力したことは衆知のことである。

釧中の創業時代を阿部校長は手紙で語っている。

「言葉遣いや行儀作法などは、稍々粗々であった。ただしその精神は、純真にして、その先生を思い学校の前途を考えるの情は、誠に涙ぐましいものがあった。だからよく先生の命令を守り、困難な作業にも従事した。ある春、植木を別保から運搬しようとしていた時鉄道馬車が転覆した。熱田校長、私（阿部）そのほか二、三人の職員と庭師らが深いヤチ（湿地）に投げ入れられた。周囲全部がヤチだから自分の力で抜け出すことはできない。慌てて転び泥水を飲む者が多い。そのとき必死になって生徒らは棒を、板を、紐を差し出し、投げ入れ、ある者はヤチに飛び込み先生方を助け、皆はようやく救われた」と。

これによってもわかるように教師と生徒は、共に苦労し、相親しみ、相助け合った。この善良さ、一見粗野な行動には覆気があり、熱があり、しかも従順な中学生であった。

これに社会性をもたせようと「誠愛勇」の校訓を作り更には「生徒心得書」を制定したのである。

また十四期会長―釧路医師会長―の橋場亮二は釧中時代をふりかえって「人はとことんまで屈辱感を受ける必要がある」という。

「よく大人は、今の若い人たちをみて軍隊生活の必要をとなえる。でも私は、そうは思わない。軍隊生活にもあるだろうが、屈辱感を受けることがあれば人は成長する」

日進小学校でガキ大将だった橋場が釧中へ入ったら、上がいる。いるどころではない。二年生から五年生まで上級生のすべてが絶対的に上なのだ。

少しのさからいも許されない。完全な服従を強いられる。それが彼には屈辱だった。

軍隊での階級のちがいが、厳然とした命令服従となるように旧制中学での上級生下級生の差は逆らえない服従であった。それが人生の上で大きな成長に役立つ、と彼はいうのだ。それを〝屈辱感を受ける必要がある〟の言葉で語る。

柔道などの学年対抗試合では負けるを承知で「なにくそ」と上級生にぶつかる。先生との試合では三年生の中堅どころが相手である。

大将の安田惶教諭は大いに奮闘した。相手の生徒が先生の首筋のエリをつかんだ。応援の生徒がどなった。「ツルをつかめ」と。

一同はどっと笑う。安田教諭の仇名はカボチャであった。

このように先生と生徒は仲が良く、ユーモアもでるゆとりが昔はあった。現在にはそれがない。

戦時中の集団暴力による下級生いじめは釧中にも数々あった。同期会はいいが、上級生との総会などには出席しない、という期もある。しかし、いじめられた人たちは社会に出てから、橋場や野坂のように、努力し、歯がみして頑張り、成功者となっている人が殆んどである。屈辱感が成功させた。

電算写植機設置により、より早く、より美しく

釧路綜合印刷株式会社

085 釧路市白金町19－2　TEL 23-9201(代)

FAX 23-9205

わが青春は…

多忙だった釧中時代

釧中二十二期　平川剛喜

満州事変、上海事変そして蘆溝橋事件と続く日中戦争前、突入後の軍事色の濃い時代に釧中に学んだ。従って服装もカーキ色の制服にゲートル姿で、リュックサックに教科書や弁当を詰め込んで通学した。今も出世坂を登り降りするたびに、リュックサックを片手で押えながら始業時間に遅れまいとして片山石郎君や武隈茂弘君と坂道を走り登った姿を思い出している。

兎狩り、塘路往復の強歩、昆布森行軍、旭川での兵営宿泊、帯広でのご親閲、剣道部の全道優勝、市民運道会での応接団合戦などが走馬燈のように浮んでくる。

三年時から、工業組、商業組、受験組に編成されたが、受験組は当時の佐藤修一校長の方針で、一人でも多くの上級学校への合格者を目指してスパルタ的指導がなされ、担任の千葉長治先生(国漢)も一生懸命で授業開始前、終了後各一時間位、国漢、英数の課外指導時間を設け、遅刻者があると学校の正門前まで出かけて叱咤し、罰当番を科し、また模擬試験のたびにその成績順に机に座らせたり、各課目の試験成績発表も、時によって最高点者からあるいは最低点者から呼びあげたりして競争意欲をかきたてたものである。おかげで四年生からの進学者も多く、五年生卒業時には、希望者の殆んどが進学できた。小生も雑貨商を営んでいた母の手伝いをしながら、級長とか分団長とかの役を仰せつかり忙しい釧中時代を過したが、良き友人にも恵まれたことは幸いであった。

その後、進学、転職、兵役と色々思い出がつきないが、わが青春は、当時の環境下で家事の手伝い、受験勉強、軍隊と心に落着きのないままに経過した人生の一こまであり、多感な青春時代にまだまだ努力すれば、一層意義のある時期を過し得たのではないかと儚ない反省の夢を見ている。

(釧路新聞社常務)

間仕切りした体育館での高校生活

湖陵六期　守谷生弘

卒業して、もう三十二年がたちましたが、三年間の高校生活の中で強く印象に残っていることは、火災のため校舎の大部分が焼失して、三年生の時、ベニヤ板で間仕切りした体育館で勉強と部活動をやったことです。

教室といっても、天井の方は囲われてなく、授業中は何人かの先生の熱気にあふれた声が聞こえてきて、一時間でいくつもの授業を受けたような気がしました。したがって、比較的声の小さい先生は、メガホン持参で指導されていました。また、教室が少ないため二年生は隣りの中学校へ通い、一、三年生のみが、一緒でさびしい生活でもありました。

部活動では、卓球をやっていましたが、練習は清掃終了後、きちんと整頓された机を部員がもう一度片付け、教室内に一台の卓球台を置き、練習に励みました。

練習時間は、定時制の生徒がやってくるので、定時制の授業の始まる前に、練習を終了し、もとどおり机を整頓しました。

こんな状況の中で、全道大会に地区代表として参加し、前年度の優勝チームの帯柏高を破り、優勝チームの函館高に3対2で惜敗した成績がとれたのと、千葉先生(現浦河高校長)の毎日の精神面の指導と先輩の田中、小泉両氏(現釧路市役所)の技術面の指導も大きかったです。

しかし、苦境にたった時のそれに耐えた一つの成果でなかったかと懐しく思い出されます。

とにかく、先生方は、授業や部活動では、やる気満々でした。私にとって、立派な校舎がなくさびしかったですが、精神的には幸せな高校生活でした。

今、教職の道にあって、私自身その時の先生方のようになるよう努力しておりますが、後輩の先生方も、たくましく、やる気ある先生となるよう育てたいとがんばっている毎日です。

(釧路町立知方学小学校長)

御卒業・御入学の喜こびを1枚の写真に……

湖陵・江南・北陽・星園・短大高校他

市内小中学校卒業アルバム専属作成

株式会社　工藤写真館

工藤寿男(釧中26期)

釧路市南大通5—3—7　TEL 41—5751

駐車場(20台収容)完備

学園だより'85ことしの活動をふりかえる

同窓生の皆さま増々ご健勝のことと思いますが、いかがお過しですか。例年になく厳しい寒さの続いたこの冬もようやく峠を越し、日ざしもやわらぎ春の訪れを感じさせる頃となりました。

間もなく湖陵高校第三八回目の卒業式を迎えます。手元の資料によると、今春の卒業生四一一名を加え、創立以来一七、九一三名の多くが母校を巣立ったことになります。日本各地で、各界・各層にわたり一層のご活躍をお祈りする次第です。

道内の私立大学関係は一段落しましたが、連日新聞紙上で合格発表が相次ぎ、受験生は勿論、父母や学校にとって一喜一憂する時期が続いています。進路指導部のまとめによると、卒業生の動向は別表の通りで、進学についての今年の特徴は①私大難化の傾向が続く中で、共通一次試験の結果が全国平均を昨年より上廻ったこともあって、ここ数年続いた国公立離れの現象が軟化、②私大の受験校が減少、③短大志望者が大巾減、④各種、専門学校志望者が大巾に減少、その中で看護学校志向が相変らず根強い、⑤一校当りの受験校が減少等々があげられます。詳細な分析は結果を待ってからとのことですが、いずれにしても年々門戸は狭くなり受験生にとって苦しい状況はまだ〳〵続きそうです。

一方、就職希望者は二七名とわずかながら減少（昨年三二名、一昨年二九名）、現在二二名が内定、他校に比べ希望者の少ない本校にも厳しい状況がうかがわれます。

最近の高校生は気力に欠ける、耐久力が乏しくなったと言われ出して久しいが、そうした生徒たちの体力増進を目的に、生徒会運営による校内体育大会（夏、秋二回）と共に、本校の伝統ともなっていたマラソン大会に代って湿原競歩遠足（サイクリングロード、道々弟子屈線、湿原道路約三〇キロ）が実施されています。昭和五六年、マラソン中に女生徒が不慮の死に遭遇するという事故を契機に、マラソン大会の見習しが迫られました。その後二年間様ざまな観点から検討を加えた結果、五九年度から新たに体育行事として実施されることになったものです。

一年間のクラブ活動の結果についても若干触れておきます。

高体連、国体、新人戦等全道・全国大会に出場した運動系クラブは延べ三〇部にのぼり、文化系は高文連、その他の大会に一三部が参加しました。全国大会出場のクラブは、合唱（八月、盛岡）、放送（八月、東京）、陸上（八月、金沢）、バスケットボール（八月、石川県七尾）、アイスホッケー（一月、群馬県伊香保）、ハンドボール（三月、名古屋）、特にハンドボールは、男子五年連続六回目、女子は二年連続三回目の選抜大会同時出場となります。尚土田映子さん（一年生）が有島記念文芸賞を受賞したことも紹介付記しておきます。

以上のように、多くの生徒諸君が普段の努力の成果を発揮するために全道・全国に遠征している一方で、遠征費が予算を大幅に超過するといった事態も生じています。そのために父母の皆さんや関係者のお力添えを戴き何とかこの急場をのり切っていますが、今後とも同窓生の皆さまのご援助をお願いする次第です。卒業式が終りますと新年度に向けまた慌しい日々が始まります。同窓生の皆さまの増々のご活躍をお祈りしながら学園からの報告といたします。

（文責　湖陵四期　和田信幸）

◎進学者の受験校（延べ数）

	男	女	計
国公立	141(135)	47(48)	188(183)
私立	231(275)	76(83)	307(358)
国公立短	6(4)	19(25)	25(29)
私立大	0(0)	59(99)	59(99)
各種・専門	9(23)	23(69)	32(92)
合計	387(437)	224(324)	611(761)

（　）内は昨年

◎卒業生の動向

	男	女	計
進学志望	250	134	384
就職志望	13	14	27
自営	0	0	0
合計	263	143	411

第六回同窓会主催教育講演会

北海道大学工学部教授　佐久間哲郎氏（湖陵三期）

佐久間哲郎氏

同窓会主催の教育講演会は、当初学校側の希望で進路指導の一環として実施されてきたが、年々充実してきており、同窓会と在校生の絆を強める唯一の行事として、すっかり定着した。

今回は、十月二十九日にその第六回目として、湖陵三期で北海道大学教授である佐久間哲郎先生に講演をいただいた。

「わが青春を語る」という演題で、釧中、北大時代を通しての真摯な学生、学研生活について、かなり控え目に話し出された。以下講演の内容について要約的にまとめてみよう。

釧中時代は、ちょうど、旧制中学時代の終わりの時期で、学制改革によって新制高校になり、日本中が大混乱の時代であった。学舎生活六年間は、物的な面で耐乏生活を余儀なくされたが、それがかえって素朴に少年らしく、将来に対して大きな夢を抱き、希望に燃えて、青春を謳歌したといえる。特に寄宿舎生活の中で上級生と共に起居した団体生活、その後の汽車通学にまつわる体験も大変良い想い出になっている。

現在の立場になるきっかけは、高校一年生の時、湯川秀樹博士が日本人としてはじめてノーベル賞を受賞されたことである。北大卒業後、幸いにも選ばれて、京都大学の湯川記念財団研究所で学び、湯川秀樹博士の率いるスタッフの下で二年間指導を受けて、研究に従事できたことによる。

現在は、ハイテクノロジーの研究に取り組んでいるが、産学一体となって社会に貢献できればと願っている。

最後に、あらゆる分野に関する情報を的確に処理し、常に新しい発想を求めていかなければならないこと、最近の学生は何か迫力に欠け、気力が乏しいように思うので、高校三年間の生活では、勉学はもちろん、気力、体力の涵養に努力し、目的にむかってバイタリティ溢れる湖陵魂で努力してほしいと、物静かではあるが、説得力のある言葉で語りかけていた。

生徒達は、湖陵の大先輩からの講演を聴くというよりも、大学の先生から教えを受けるという意識が強いせいか、かなり緊張していたが、崇高な学問の世界に、しばし思いをはせているようであった。

（文責湖陵高校教諭岩谷吉彦）

事務局だより

▼　母校の敷地が緑ヶ岡のゴルフ場の場所に決って、校舎の改築が待たれるところだが、校舎改築期成会が結成されて、ここ数年の中で精力的に陳情活動を行っている。十二月九日に、鰐渕市長をはじめ、学校長、事務長、ＰＴＡ会長、後援会長、そして同窓会の長内会長が陳情におもむいている。北海道教育庁に植村教育長を訪ね、北海道議会では、議長及び釧路市出身で同窓の綿貫道議らに、校舎の早期改築実現を陳情した。

▼　今年も、十勝支部の同窓から招待を受け、三月二日に、長内会長と久本副会長が、懇親会に出席した。恩師の男沢先生・井上先生をお招きして、盛大に催された。同窓会本部を代表して、長内新会長が挨拶をし、釧中十期で最長老の雪野源治郎氏（池田町で歯科医院を開業している）の祝盃の音頭で懇親会に入った。十勝支部は、釧高女と江南の同窓生との合同の集いとして、大変なごやかな会なのである。

▼　釧路教職員湖陵会の広報紙第六号が二月十日に発行された。本年度は役員交代の年になっており第十二代会長に、朝陽小学校長の上岡信明氏釧中三十期が選出された。会長就任のあいさつの結びとして、「不断の研究と修養を中軸に先輩は後輩を慈しみ、後輩は先輩に教えを乞い、豊かな人間性で専門性に徹し、社会性に富むよう自己を培い磨きたいものである。」と述べている。教職員湖陵会の発展を期待している。

あとがき

▼　今年は例年になく四季を通して寒暖の差の大きな年である。夏の暑さはよいとしても、厳寒の時期は相当寒さがこたえた。母校の現状では、生徒諸君はきっと耐えるのが大変だったと思う。校舎の中を寒風が吹き抜け、そして体の中を突き通す状況が目に浮かんで、一日も早く、校舎が新しくなることを願わざるをえない。

▼　新聞に、母校や同窓会のニュースが報道されるのを読むのは良いものである。記事にもした「五十年ぶりの同窓会」「ブラジルの同窓生のふるさと帰省」など、人間の絆を求める心の働きのすばらしさや大切さを考えずにはいられない。そして、在校生の活躍がある。ハンドボール部が男女そろって全国大会に二年連続出場。大変、おめでたく、すばらしいことである。

▼　三月は学窓を巣立つ季節、今春湖陵高校を卒業する生徒は四百十一名とのこと。従って、わが同窓の仲間は総数で一万七千九百十三名になる。卒業生諸君の前途に栄光あらんことを祈る。

編集にたずさわった人

徳田　広　遠藤　隆吉
和田　信幸　豊島　弘道
関口　政司